



[令和 6 年 12 月 11 日 定例会発表要旨]

## 「島 義勇について」

手稲郷土史研究会 元会員 梶本 孝 様

島義勇にふれる前に、佐賀藩について簡単に述べておきます。  
鍋島直政は佐賀藩江戸藩邸で生まれた。1830（天保元）年、  
17 歳になった直政は父斉直（なりなお）から家督を引き継ぎ 10 代  
目藩主となります。



故郷に帰省するため江戸藩邸を出発し、品川宿で休憩していたが  
夕方になってもなかなか出発しないので話を聞くと「借金取りの商  
人が宿の前に大勢集まり出発できなかった」とのことである。直政はこの時初めて佐賀藩  
の財政が借金まみれであることを痛感し、先代からの悪い習慣を全て排除する大革命に着  
手します。

- 1) 役人の 3 分の 1 を解雇する大規模なリストラを敢行する。
- 2) 身分を問わず優秀な人材を登用する。
- 3) 藩政の中心を優秀な革命クループで固める。
- 4) 農政改革…小作人が地主に支払う「小作料」を猶予する。
- 5) 離れた場所にあった行政組織を自分の直ぐ側の本丸に集め、直政が直接指揮できるようにした。

さらに直政は蘭学を取り入れ、日本ではじめて反射炉を建設。大砲をつくる鉄を確保  
することに成功し、イギリスで開発され薩英戦争で使用された“アームストロング砲の  
製造に成功します。慶応元年には佐賀藩の三重津海軍所で、日本初の実用蒸気船「凌風  
丸（りょうふうまる）」が完成した。その他、洋書の翻訳や蒸気車の制作、ガラス、写真  
術研究などを行い、田中久重（東芝創業者）など多くの幕外の有能な科学者・技術者を  
スカウトして、医学、科学技術、軍事等のさまざまな分野で近代化政策を進めました。  
直政自らが粗衣粗食を徹底し財政改革を行い、佐賀藩を雄藩の一つに押し上げました。

安政 3 年直政は、島義勇に、蝦夷地の探検調査を命じます。

義勇は、箱館奉行堀の近習となり、松浦武四郎の協力を得て、蝦夷地及び南樺太を  
一周し、その経過を「入北記」としてまとめました。

このように、佐賀藩は積極的に西洋技術を取り入れ、幕府や全国諸藩に大きく差を  
つけて、幕末期に壮大な力を発揮することになります。

島義勇は、文政5年、佐賀藩士・島市朗右衛門の長男として生まれた。藩校・弘道館では優秀な成績であったため、直政より3年間の諸国遊学を許され、水戸藩の藤田東湖をはじめ諸国の賢者と交流した。佐賀に帰った義勇は、藩主の外小姓を長く勤めた。戊辰戦争では、新政府軍の側に立って奮闘した。戊辰戦争が終わると、義勇は直政の意向に従い新政府に出仕した。初めは「蝦夷地御用掛」に、次いで開拓使の「首席開拓判官」に就任した。

明治2年10月、義勇は錢箱で民家（白浜園の自宅）を借り上げて開拓仮役所とここを拠点に札幌の間を往復して、札幌本府の建設に邁進した。

このころの札幌にはほとんど人気はなく、この地に住む和人は、豊平川河畔の通行屋管理人兼渡し守の忘村鉄一と、対岸で同じく渡し守兼猟師をやっていた吉田茂八の2世帯7人であった。厳冬の中、犬と添い寝をしながら本府の建設に当たっていたが、政府から船便（昇平丸）で届くはずの”米”が江差沖で難破し貴重な米と木材を全て失ってしまった。

苦境に立たされた義勇は、結局、開拓使に配分された予算をほぼ3ヶ月で使い果たし、箱館の東久世長官に予算の増額を求めるが認められなかった。

そして、明治3年1月、義勇は突然、首席判官のポストを解かれ、すぐに帰京することになった。この後、大学少監・秋田権令・明治天皇侍従職等を歴任した。

明治7年、佐賀県下の士族の不穏な空気を静めるために帰郷するが、逆に苦境にある士族に同情して、江藤新平らと”佐賀の乱”を起こし刑死してしまった。

\*  
\*\*

## 例会講演中の梶本 孝 元会員



島 義勇の像



札幌市役所

札幌市庁舎一階ロビーの島義勇銅像



北海道神宮

開拓判官島義勇銅像（北海道神宮）

## 石狩油田跡地に行ってきました

手稲郷土史研究会相談役 鈴木清士

私はいま、手稲区前田の1条12丁目に住んでいますが、ここは昔日石の製油所があったところだと聞いています。そんな縁もあって日石の製油所について調べることにしました。

茂内元会長をはじめ会員の方々から資料の提供を受け準備を進めていましたが、元当々員の釣本峰雄さんから石狩油田の跡地を見に行かないかと誘われ、二つ返事で案内していただくことにしました。以下私の感想です。

### 1 石狩油田八の沢鉱業所跡地

12月1日快晴、釣本さんの車に同乗して留萌・稚内方面に向かう国道231号線を走り、石狩河口橋を渡って八幡で右折、石狩高岡を経由して五の沢へ、ここからは細く曲がりくねった林道を通して八の沢に到着。

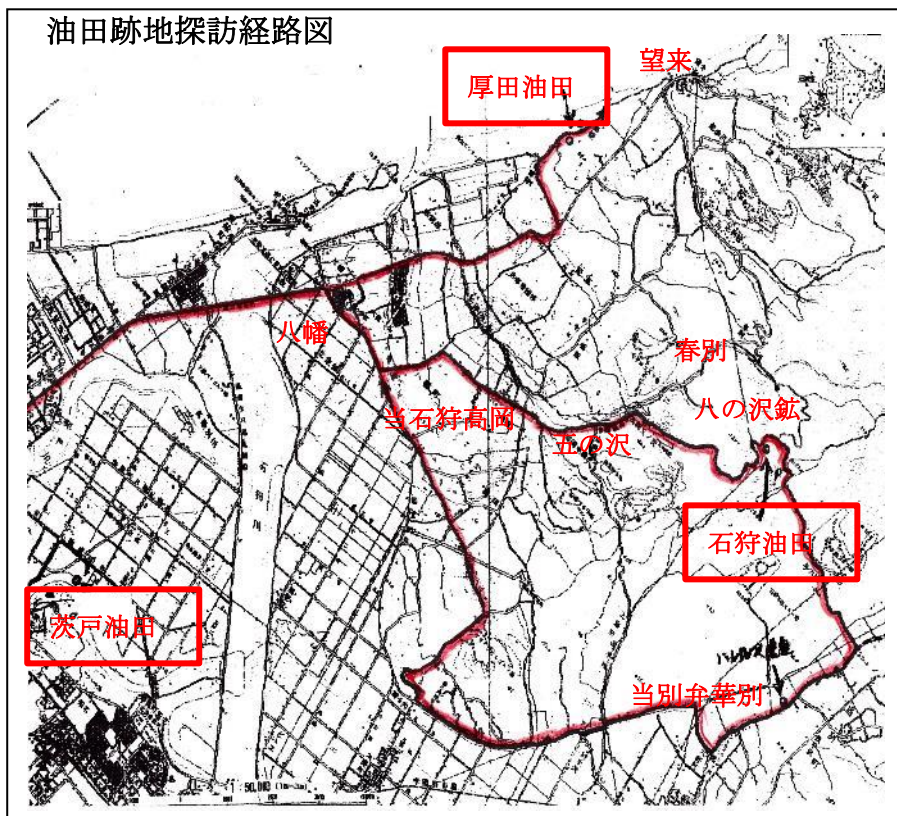
記念碑のある高台から辺りを見渡しましたが、雑木に覆われて昔を偲ぶものは僅かしか残っていませんでした。

かつてこの地にはガソリン精製のプラントや44本の櫓が立並び、250人の従業員とその家族が住んでいたそうです。石油採掘の産業遺産として、櫓の1本でも残しておくことはできなかったのでしょうか。

厚田油田には当別の弁華別経由で行くことになりました。



石狩油田八の沢鉱業所跡 記念碑



八の沢鉱業所跡 俯瞰図

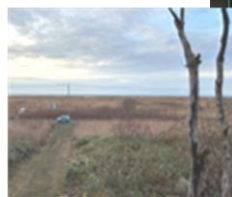


小学校の校門2基

## 2 厚田油田跡地

再び国道 231 号線に出て望来に向けて北上、途中左折して段丘を降りると海岸まで荒涼たる原野が広がっていました、知津狩川(しらつかりがわ)北岸の通称無煙浜の油田ですが、最盛期には櫓が 150mおきに 200 本並んでいたそうです。

昭和 36 年廃田となりました。



荒涼たる無煙浜



海岸段丘のふもとにある油井

## 3 茨戸油田跡地

札幌市茨戸と石狩市生振が茨戸川を跨って開発された油田ですが、今回は茨戸川北岸の生振側の油田跡地を見てきました。

この油田は平地の畑作地帯に出現した油田なので、道路も近く開発も容易ですが、土地の買収などにかかったのではないかと思います。

ガトーキングダムの建物が遠望できました。

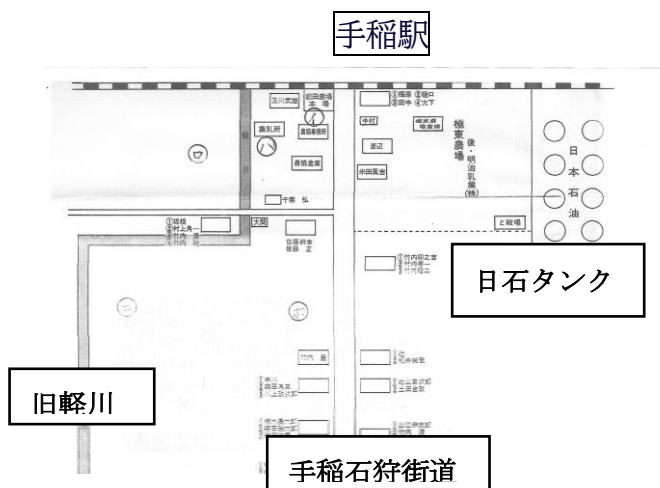


ガトーキング  
ダム札幌

畑の側溝に油が  
滲み出ている

※「百聞は一見に如かず」大変貴重な旅でした。

### 参考資料



昭和 10 年代当時の手稲駅北

口

次回定例会 2 月 12 日【水】 18 時 15 分 区民センター3 階視聴覚室

発表内容「札幌のサイロについて」手稲郷土史研究会会員 菊池 博行

手稲郷土史研究会 会報「郷土史でいね」第 201 号

令和 7 年 1 月 8 日発行

発行責任者：沖田紘昭（手稲郷土史研究会 会長）

編集：立花邦雄・川上義昭

♣006-0818 札幌市手稲区前田 8 条 11 丁目 4-5

林俊一方 手稲郷土史研究会

\*TEL 090-3381-4994 \*FAX 011-682-9874

♣メールアドレス teinenorekish@gmail.com 担当 菊池 博行